

パリの印象

——8年ぶりの訪仏から——

亜細亜大学 藤井良治

I

この3月、用事があってパリに3週間ほど滞在した。1965年から1966年にかけて1年間滞在していた私にとって、8年ぶりのフランスであった。8年前のフランスは、私の胸をときめかせるに十分魅力ある国であったが、今度のフランスは、色あせて見ただけでなく、現実的な面ばかりが目についたのは、フランスが変わったのか、観察者である私の方が変わったためだろうか。もちろん、8年間のあいだにフランスそのものも変わったけれど、日本ほどには変化は激しくない。かって私が住んでいたパリの町の界わいは、以前あった店がなくなって、新しい店が出来ていたりしていたけれど、殆んど変わってはいない。ただ驚いたのは、自動車が通りを埋めつくすほどに増えたことで、日本のように駐車場の新設もままならぬパリでは、大通りからちょっと入ると、道の両側に駐車している自動車のため、くるま一台通るのがやっとといった有様である。

パリの3月はまだ冬から完全に抜けやらず、くもりや雨の日が多い。そのためか、観光シーズンの端境い期でもあって、比較的観光客は少ないということであったが、日本人の観光客でごった返している感じであった。ルーブルへ行くと、日本人のグループが部屋から部屋へ駆け抜けるように名画を觀賞して行く。記念写真屋は「シャチョウサン、シャチョウサン」といって呼びとめる。デパートも、三越、高島屋、大丸があって日本語で買物ができる。雑誌には、NIKON, CANON, YASHIKA, NISSAN, TOYOTA ……等の広告が並び、フランスに

はカメラや自動車がいないのだろうかといふかったりしたくなる。

こんなフランスではあるけれど、以前1つしかなかったテレビのチャンネルは3つか4つに増え、民間放送もでき、少しずつ古い建物が新しい近代的な建物に変わり、以前はカフェにしかなかった電話も、日本のように通りに電話ボックスができて、日本もパリもだんだん変わりなくなってしまうのではないかという感じが強くした。

II

フランスの春はまた賃上げ要求 *revendication* の季節でもある。連日ラジオのニュースはストライキと賃上げでもち切り、ニュースを聞き逃したため、電力ストで食堂が閉まって弱った。この春の賃上げ要求は日本同様フランスでも激しかった。というのは、世界中を捲き込んだ石油危機のおかげで例年にないインフレのため物価上昇が激しく、それだけ賃上げ要求も大幅であった。

日本ではごく当り前に思われていた値段の取りかえはフランスでも大騒ぎであった。二、三日前に買ったものをまた買いに行く値段が変わっていたという話は方々で聞いた。事実、私も *petrole hahn* という安い整髪料を一週間後にもう一つ買おうと思って行ったら、4,50サンチーム上っているのには驚いた。衣料品は以前から高かったが、日本でならせいぜい3千円前後で買えるジーンズが100フラン(約6000円)はする。所得水準はもう日本の倍ということはないであろうから、やはり高いのであろう。それに引きかえ、食料品や食事はそれほど高くなっていない。学生食堂は、以前1フラン40サンチームだったのが2フラン50(約150円)で、食事の内容は、サラダ、肉、ポモフリと称する揚げジャガ、デザートと、見た目は悪いが、日本で食べたら絶対に500円では食べられないだろう。ベル・エポックの頃の名残りを止めているモンマルトルのレストランでワン・コース取って14フランちょっとで、戦前の映画の世界にいる気分になれる。同じくらしい内容の食事を、フランス慣れした外国人らしい男が、ア・ラ・カルトで8フランちょっとであげていったのは口惜しかった。

8年前には、日本人たちの間では「ダメなフランス」ということばがよく聞かれたが、今日でも本当にダメなフランスなのだろうか。すでに8年前から工事に取りかかっていたモンパルナッス駅界わいは、ほとんど完成したとは云え、まだ整備が完全に終わっていないのに驚く。日本では駅ビルと称するのであろうTour Monparnasse (モンパルナッス・タワー) が高くそびえ、パリの近代化の象徴のようでもある。高層化の進む反面、都市高層化に反対する人たちの大集會も開かれ、高層化が緑地や空地を増大させていないこと、家賃の高騰に拍車をかけていることなどを声高に叫んでいた。

III

ところで、今回の目的の一つは、4、5年前から翻訳する予定になっていたクセジュ文庫のSociologie de la vieillesse (老年の社会学) の著者であるポール・バイヤ氏に会うことだった。ハイジャックやパリ郊外での飛行機墜落事故などがあったため、急に出発が早まり、出発の朝、翻訳し終えた原稿を出版社に郵送するような次第だった。私の語学力不足のため、ところどころバイヤ氏の原文は難解な個所があったので、それを直接質したかった。

ホテルはオデオン座のそばで、朝食付き27フラン(約1,600円)とやや高かったが、エレベータ付き(定員3人というのは初めてだった)なので我まんした。ホテルに着くと、早速連絡してあったバイヤ氏に手紙を書いた。バイヤ氏からはすぐ返事が来た。バイヤ氏は、INED(人口問題研究所)で老人問題を担当されている。INEDは、パリの南、シテ・ユニヴェルシテールのそばの小さな裏通りとでも云うべきコマンドゥール通りにある落ち着いた近代的な建物だった。1時すぎに行く約束だったのでその時間に行くと、どの事務室もまだ昼休みと見えて空っぽ、向いの部屋から女の人たちの声がするので、声をかけると、昼食中のジーバン姿のバイヤ氏の秘書嬢が出て来て、バイヤ氏は昼食に外へ出てまだ帰らないという。10分ほど廊下で待っていると、ロシア人のような帽子をかぶった老人が来るので、こちらから声をかけようと思うと、向うから、Bon jour, ムッシュ

・フジイという声がかかって来た。老人と云ったが、バイヤ氏は1920年生れだから、まだ老人と云うにはほど遠い筈だが、フランス人は年をとると齢よりふけて見える。早速バイヤ氏の本についての翻訳上の質問を浴びせたが、こんなやさしいことを何故質問するのだろうかと思ったかも知れない。バイヤ氏の文章は、ときどきわかりづらいところがあると云うと、自分の文章が悪いからだろうと云って私をなぐさめてくれた。例えば「文明社会を志向する社会において dans une société qui se veut policée」という文章で、どうして policedee などという耳なれないことばをつかったのか解せなかったが、バイヤ氏も、ほかの部屋からプチ・ロベールの辞書を持って来て、civiliséeと云いかせてくれた。そして自分の文体を知ってもらうようにと、百科辞典の抜き刷りをくれた。スペイン語の翻訳も出ているが、スペイン語に自信のある自分から見るとスペイン語版は誤訳だらけだが、自分は日本語が出来なくて残念だと云うから、私にとってはかえって幸いだということ、vous avez de la chanceと云って笑った。INEDには、日本から研究生が2人来ていて、フランス語が素晴らしくよく出来る云々ほめちぎっていた。バイヤ氏は国連にも関係していて、ニューヨークでの同僚の日本人は、頭が切れる上に、ずば抜けた語学力を持っていると称賛していたが、たどたどしいフランス語の自分が恥しくなったほどだ。バイヤ氏は、日本の社会保障、とくに老人問題にも関心を持っていた。フランスの年金問題については、多種多様な年金制度についてこんな不合理なことはない、既得権を持っていたり、強い組織の者が得をし、その上、職員と非職員の身分上の差がいつまでも存続するのは馬鹿げているといい、かつてのラロック委員会の作業メンバーとして参加した氏の信念の一面をうかがわせ、日本の厚生年金が、大部分の被用者を、それも何ら身分上の差がないことを羨ましがっておられた。JAPONと書かれたエール・フランスの大きなポスターがバイヤ氏の部屋の壁に貼ってあったが、そのポスターを指しながら昼食を約してバイヤ氏に別れを告げた。

IV

バイヤ氏のほかにフランスで会ったのは、もう一人CNAM（医療保険全国金庫）のシアンサラ=嬢である。CNAMからは、若い男の声で電話がかかり、それがまた、ツァ、ツィツッ、ツェ式の不思議な学生なまりで、シアンサラ=嬢が火曜の9時に待っている、ということを理解するのがやっとだった。CNAMの建物は、以前のCNASS（社会保障全国金庫）をそのまま引き継いでいた。応待に出て来たのは例の青年で、パンタロンにハイヒール、それにペンダントまでしているのには少々びっくりした。シアンサラ=嬢はスペイン系かと思うような黒髪のおちびさんで、この部屋は空いているから毎日来ないかという。私は最近の医療保険に関する情報やフランスの病院制度について知りたかったので資料を見に1日おきに通うことにした。時々、地方から出張して来た医療保険金庫の人たちが資料のことで訪ねて来て、かつてのFNOSS（社会保障全国連合会）時代の資料が継続刊行されていないことを云うと、急にシアンサラ=嬢は感情的になって、vous savez, écoutezを連発した。察するに、例の5月危機前後の社会保障制度改革によって、いまだに各社会保障機関の調整がうまく行っていないようであった。診療報酬のことで、料金超過の限度について質問すると、彼女は医師が無制限に診療費を請求できると云うので、そんな筈はないと云い合いになり、医療保険の担当者に電話するとやはり私の云ったような返事だったが、彼女は、自分もそう思ったが確認のため電話したのだと格好をつけている。それから私はいささか大きな顔で(?) いろんな資料を読ませて貰うことにした。CNAMの「年次報告書Rapport Annuel」は大部で参考になるものだったがどうしても余部がないから写して行けという。私は毎回コピーしてくれるように頼むので、とうとうどこからか探して来て一部いまいましそうにくれた。翌日、私はバイヤ氏にと持って来た唯一の日本のおみやげを彼女に贈ると、シアンサラ=嬢は飛び上らんばかりに喜んで、私を抱いて両方の頬にキスされたのには、こちらが当惑したほどだった。彼女はパリ生れのコルシカ人、父親は退職官吏でコルシカに引退し

ているとのことだった。コルシカは海も空もすばらしい。テレビでよく見る東京の過密と、汚染された空の下でどうやって暮しているのかと憐まれたりした。その反面日本はとても金持ちだと思っており、私がそんなことはないと言明してもげげんそうだった。

あまり社会保障とは関係のない話ばかりになってしまったが、複雑多様化している現代社会に適合するため、世界中が同じような方向に向っており、フランスも日本もさして変わりなくなりつつあるのではないかという印象が強かった。

10年かかっていまだに未完成のモンバルナッス界わいを見ていると、ダメなフランスと息の長いヨーロッパとがダブってくるが、パリ西郊のニュータウン、ラ・デファンスを見るとことにその感が強い。まずパリとニュータウンの間を10分とかからない直通高速地下鉄道を通して、徐々にニュータウンを整備している姿は、日本とは全く逆の発想で、しかもゆっくりだけれど、すぐ色あせてしまうようなことのない街づくりは、やはり短距離選手のわれわれの社会とは違うのだという感を強く持った。

